

UIFA JAPON NEWSLETTER



No.79 May. 25, 2009

■主な内容

- 第46回海外交流会「インド圏のイスラーム建築」報告
- 第17回 UIFA JAPON 総会と記念講演会のお知らせ
- 大地の声に耳を傾ける
- 成瀬記念講堂での総会開催によせて
- 風水と「風の道」—現代に風水を活かすには
- 魅力的なりノーション No.4 —デンバーのグレートパークヒル地区
- 韓国女性建築家との交流
- この指とまれ「旧倉家住宅とヒルサイドテラス見学会」
- 会員の本「韓国現代住居学—マダンとオンドルの住様式」



人口湖に浮かぶスール朝の王墓でシール・シャー・スール廟（サハラム1540年頃）。タージ・マハル（アグラ1630-54年）に至るまでに、このような建築の歴史的背景がある。（写真：山田幸正）

46th International Exchange Lecture Islamic Architecture in India 第46回海外交流会の会報告

「インド圏のイスラーム建築」 —ヒンドゥ文化の中に咲いたイスラーム—

矢賀部 雅子 YAKABE Masako

インドには興味はあるが行った事がなく、宗教といえば我が家が何宗なのかもすぐ忘れてしまう。そんな私にもわかるようにやさしく噛み砕いた話から始まった。

イスラームとは、服従という意味で唯一なる神アッラーへの絶対服従。イスラームはそれ自体が宗教の名なので「イスラム教」とは呼ばない。「六信五行」というのがあり、アッラー・天使・啓典・

予言者・来世・運命、六つの事を信じ、五つの行がある。①信仰を誓い、②一日5回の礼拝をし、③年に少なくとも1回の喜捨（寄進税）をし、④年に1回1ヶ月の断食をし、⑤一生に1回は巡礼をする。私には出来そうも無い。

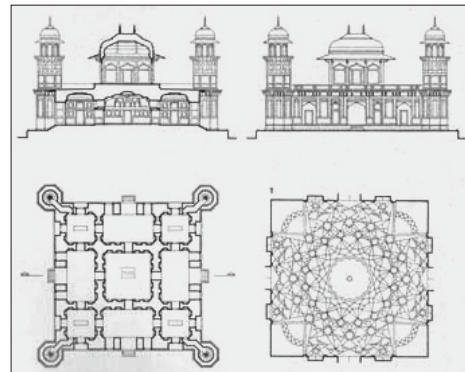
モスク（礼拝する場所）には中庭があり、それをとり囲む回廊、礼拝室のミフラーブは窪んでいてメッカに向かっている、階段状の説教壇、ミンバル。生活に根付き、切っても切り離せないイスラーム、そこから生まれた宗教建築。無神論者の私には理解出来ぬ事もあるが。大空間を作るための架構、幾何学模様配されたモスク、せり出し式のアーチの架構、等の美しさはわかるような気がする。やはり行って実物を見、体感してみたい。

講演を聴き終えたみんなの顔も、悠久の昔に想いを馳せ輝いて見えた。



山田幸正 講師
(首都大学東京 大学院教授)
(写真：古村)

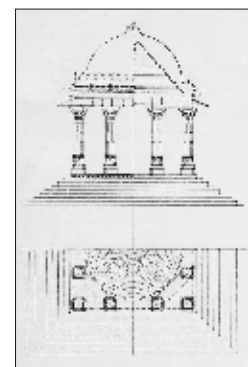
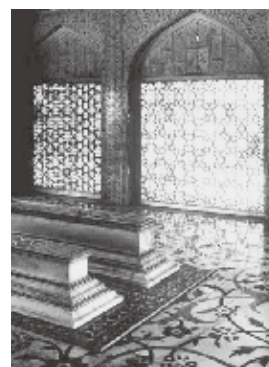
〔講演資料から〕



左：イティマード・アッダウラ廟（アグラ1628年）ムガル朝第4代ジャハーンギール帝時代の大臣の墓 平面図、断面図、立面図、墓室天井伏図（左下から時計回り）

左下：同上 室内写真
右下：12柱式架構によるイスラーム墓廟

（写真：山田幸正
図の出典：Andrews Volwahsen, "Living Architecture: Islamic India", Fribourg, 1970）



イティマード・アッダウラ廟：ベンガリールーフを持った廟。平面の凹凸はヒンドゥー的である。室内写真には象嵌による植物文様が見える。

12柱式架構：正方形の四辺に12本の柱を配した工法である。断面図を見ると、外観はドーム状であるが内部はアーチ技術以前のせり出し式の架構であることがわかる。柱間は $1:\sqrt{2}:1$ で、正方形の平面形に正八角形を内包している。

3月7日に首都大学東京で行われた講演は、キャンパス見学に続き、上記の豊富な図版とともに11世紀以前の初期イスラームからの建築歴史がタージ・マハルに昇華する過程を全貌した。インド社会を映した女性専用の礼拝空間も紹介された。（古村伸子）

The 17th UIFA JAPON GENERAL MEETING

■第17回 UIFA JAPON 総会と記念講演会のお知らせ■

- 日時：2009年6月20日（土）13時～ 2009年度 UIFA JAPON 定例総会
- 14時30分～ 記念講演会「建築における優しさとは何か」
- 会場：日本女子大学 成瀬記念講堂（東京都文京区目白台2-8-1 TEL 03-3943-3131 代）
- 講師：楳谷彦氏（楳谷総合計画事務所 代表取締役）

How to Create a Space with "A sense of a place"

大地の声に耳を傾ける

寺本 晰子 TERAMOTO Sekiko

景観を考える法末—講演会の開催

雪のなか、2009年2月21日(土)の午後、法末集落の交流施設「やまびこ」で震災復興基金を使った講演会がありました。講師は上山良子氏(長岡造形大学学長・ランドスケープアーキテクト)です。「大地の声に耳を傾ける 庭づくりと集落の復興」をテーマに集落復興への講話を聞きました。集落住民と支援者等の61人で、和室がいっぱいになりました。樹木医でもある上野裕治教授(建築・環境デザイン学科長)が同行され、講演に先立ち雪の中の法末集落を視察されました。



上山良子 講師
(長岡造形大学学長
上山良子ランドスケープデザイン研究所代表)

演題の「大地の声に耳を傾ける」は講師の最新の作品集のタイトルでもあります。講師は、まず復興を願う法末集落を、地図のなかから読み解きはじめました。時間軸をさかのぼり、広域な古地図(江戸末期頃作成らしい)に法末の地名を見つけ、周辺関係を読み、地形を読みすすめて、さしずめ「奥の院」のようなところ。「奥」がキーワードの一つではと示唆されました。

続いて、作品の数々を通して主題が語られていきました。どう地域を読み解いたか、この土地はここしかない。唯一無二の「土地の記憶」をいかに「場」に創出していったか、いかに「大地の声」に耳を傾けたか、作家が切り取った写真を使いその解・実施作品を提示されました。

ときには、大地の声は地域の軸線に呼応してはまりこみ、ときに、平和を希求する矢の道筋になっていました。

大地の声を聞き、ともに生きる集落の人々

集落住民に聞く、すばらしい景観は、神々しい越後三山などが望めるジュースポットや太陽と共に働く者のみ知る、日の出の瞬間にあらわれる朝焼けの棚田、夕焼けにしずむ棚田、季節の変わり目に雲海たなびく棚田等々です。一瞬を切り撮っていた素晴らしい写真は、集落カレンダーを飾ってきました。

集落の道普請(耕作地内までの道を掃除する)に参加したことがあります。棚田は延々と連なり、まもる人々の営為に圧倒されます。被災後、耕作放棄された地との違いは瞭然で、手のいき届いた棚田は大事な糧であり、当たり前でなくてはならない、ものなのです。この棚田や我が家の庭先の花々を、大きな集落資源にした取り組みが「庭づくり」であり「集落復興」事業なのです。

景観を考える仕組みづくり

復興基金の性質上、主体は集落になりますが、NPO日本都市計画家協会の中越震災復興PAが全面(事務作業まで)支援しています。将来像「いつまでも住み続ける法末地区」のもと、震災復興デザインの先導事業の一つ、オープンガーデン事業と名づけ、見守りチームが道筋を作ってきました。当事業の実行委員長は元集落総代の大橋毅さんで、そのほかの主女性たちを巻き込みながら、主体的に徐々に取り組みが実行されています。

全戸に配られた雪割草の鉢は、3月の山野草展(やまびこ2階講堂)のコーナーに並べられ、集落の女性たちの関心を呼びました。4月には、法末神社参道に植えられた雪割草(UIFAメンバーも参加)や各戸の庭先で路地におろした雪割草が咲きだし、法末に今年の芽吹き春の到来を告げています。法末の復興、景観づくりが集落の手であゆみはじめています。

景観づくりへのアドバイス

「大きなビジョンとやわらかいガイドライン(形・素材・色)を決めてしまうこと」これは、集落にとっての今後の進め方の意見を請われた質疑応答で、「講師だったら」と即答され、明快でした。

長岡平和の森公園(長岡市内1996年)は柿川を取り込むことを提案し、風景を一変させたデザインです。法末に行く際に訪ねてきました。市街地のなんてことない場所が、斬新で優しく、周囲に溶け込んでいました。毎年7月31日、一夜のコンサートを催し、対岸の800席から射られる矢のごとく、平和希求を発信する場となっているのだそうです。



小さな町の空隙を名所化すると進士五十八氏が評された長岡平和の森公園と柿川
(写真: FUJITSUKA Mitsumasa)



柿川を取り込んだ、長岡平和の森公園の断面スケッチ図(上山良子)

About Naruse Commemorative Hall

成瀬記念講堂での総会開催によせて

UIFA JAPON 会長 小川 信子 OGAWA Nobuko

日本女子大学校は、日本で初の女子高等教育機関として、成瀬仁蔵によって1901(M34)年に設立されました。本講堂は1906(M39)年4月1日図書館兼講堂として落成式が行われました。設計、施工は清水組でした。建物は煉瓦造でした。この建物は2度の災害に見舞われています。1914(T3)年4月に講堂の天井付近から出火し、屋根及び塔屋の一部を消失してしまいました。そして1923(T12)年の関東大震災にも煉瓦造の建物は破損し、外壁を羽目板張りにして再建されました。創立60周年記念事業として、1961(S36)年に外壁を堅羽目に、内装(照明・床板・椅子の設置、成瀬仁蔵の胸像(高村光太郎制作)のはめ込み)、2階の拡充など、旧来の形を保持しつつ大幅に変えられました。以後成瀬記念講堂と名称も変更しました。

本講堂は基礎部分に残る煉瓦造、ラテン十字型の平面、2基の屋上小塔屋を置く構造形式、翼廊開口部にはゴシック風のポインテッドアーチの窓を設け、ステンドグラスがはめ込まれているなど、創建時の面影を良く残しています。これらの点をふまえて、1974(S49)年11月1日付けで文京区の文化財に指定されました。

風水と「風の道」 —現代に風水を活かすには

村田 あが (跡見学園女子大学 教授) MURATA Aga

心地よい場所を見つけるために

部屋の西側に黄色いアイテムを置くと幸せが訪れる、といったたぐいの占いだけが「風水」ではない。心地よい場所を探す、あるいは心地よい場所を作る手法こそが、元来の、そして欧米でも受け入れられつつある「風水」である。

風水とはその土地の気候風土に最も適した居住スタイルを見つける手法であり、「背山面水」、「蔵風得水」などということばで表現される地形や水勢を整えた住みやすい敷地選定の手がかりである。陰陽五行説をもとに古代中国で始まった風水思想は、上記のような標語が示す街や集落、住まいや墓を整えることにより、そこに生活する住民や家族、墓に眠る祖先が「心地よく」すごすことができる、と考えるものである。

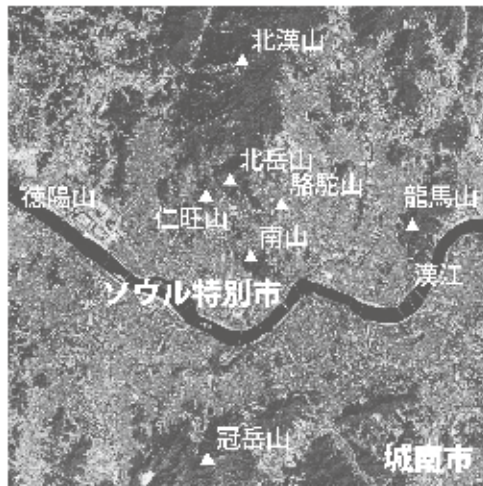
背山面水、蔵風得水の土地

「背山面水」、「蔵風得水」の場所とは、背後に北風を遮る高い山があり、左右を低い山や丘が取り巻く南面する緩斜面の土地であり、両脇の丘のふもとには川が流れ、眼前に肥沃な土地が広がり、南前方の低い山を巡って川が流れて行く、そのような土地のことを言う。京都や韓国のソウルは風水により都が定められたという説があるが、どちらも背後に高い山があり、左右を低めの山が取り囲み、川に恵まれた土地である。

自然地形の中から上記の条件に見合う場所を探すだけでなく、多少の不足は川の流れを変え、山に植林し、高い塔を造営し、池を掘ることなどにより、人為的に補う。このような修景作業を加えて理想の風景に近づけることも風水を整える際に重要なこととされる。景色の中に高い山が不足する場合は、「風水塔」と呼ばれる塔を建てたり、松を数千本単位で植林するなどしてその不足を補う。このように風水を名目に治山、治水を行った例は東アジアに多く見られる。

風の道を作る

風通しと水の流れを整えて心地よい場所を作り出す手法が風水であると捉えるならば、ドイツのシュツットガルトの「風の道」もその例に挙げられる。都心のヒートアイランド現象緩和のため



四方を山に囲まれたソウル中心部を示している。東西南北を守るとされる四神(青龍、白虎、朱雀、玄武)になぞらえた山々が都市を適度に囲むため、風水的に恵まれた地と考えられている。(図:グーグルアースの航空写真より作成 TALO都市企画)

に山から盆地に向かって森林の帯を何本も作り出し、「風の道」を遮るような建築は許可せず、都市に風を通す工夫をしている。

韓国のソウルでは、高架道路を通すために暗渠化されていた清溪川を復元し、都市に冷気を運ぶ「風の道」として蘇らせ、都心部の高温化を緩和することに成功したという。東京の都心でも皇居の緑による周辺のクールダウンや皇居から東京湾に向かう「風の道」整備が始まっている。

このような例は、現代の都市が抱える問題に対する風水的な解決方法と解釈できる。風水とは、風や水がよどみ、濁ることのないように、しかし強風や激流にはならず、「ゆっくりとたゆたい、流れ出る」ように工夫することである。

ソウルの風水向上のために

ソウルの清溪川の改修は、李明博大統領がソウル市長時代に行ったものであり、新聞報道によると経済浮揚を狙った韓国国内4大河川の大規模整備事業推進も決定されたという。整備事業関連の雇用創出や経済効果も期待されているが、長引く景気低迷で早期実現は難しそうだ。4大河川事業にはソウルを流れる漢江の整備も含まれる。後ろに山を背負い南に漢江が流れる「背山面水」の理想風水都市の姿を永続させるためにも、河川整備事業は期待されるところである。

参考書著:「風水—その環境共生の思想」 環境緑化新聞社 1996年
「江戸時代の家相説」 雄山閣出版1999年

Attractive Renovations N.4 Community Renovations - Greater Park Hill Neighborhood ,Denver

魅力的なリノベーション No.4

面的な広がりをもつリノベーション — デンバーのグレーターパークヒル地区

古村 伸子 KOMURA Nobuko

Not In My Backyard (NIMBY)「私たちの地区には要りません！」一居住者が「歓迎できない」人々や施設を地域から排除する動きを指す言葉である。かつて東京などでゴミ処理場建設反対運動が話題になったが、米国でのNIMBYの多くは、マイノリティの人々や多様な施設を排除して住宅地を「一定の水準に保つ」ために行われてきた。今回とりあげたグレーターパークヒル地区(およそ3km×6kmの区域)は、このNIMBYに抗して多様な人々を受け入れた街並みが評価されて米国都市計画協会(American Planning Association-APA)の「2008年 卓越した住宅地区」の一つに選ばれた。APAが選ぶ基準は、居住者の日々の暮らしに貢献していること、自動車だけでなく自転車や歩行者などにも適応していること、建築的に興味深い特徴をもっていること、人と人がつながるように仕向ける街並みであること、地区の人々の参加を促進していること、など7つの項目である。

この地区は1887年からの歴史を持つ。1960年代にキング牧師に「最も歴史ある多くの人種による磐石なコミュニティ」と称された。ともするとNIMBYに傾きがちな議論をアフリカ系の住民を受け入れる方向に向けた1950年代の活動がもとになって現在の地区組織が出来た。当時人々のつながりを促した交流パーティーが現在も盛んだ。

ここにはまた、その長い歴史を示す様々な建築様式が非常に優

美な姿で生きている。当時の屋根職人や大工たちの卓越した技能を、今も見ることができる。一部地区はデンバー市の歴史的地区が含まれ、建て替えなどに厳しい制限がある。これは市民運動がきっかけでつくられた、地権者の発意で選定される制度であり、上から定められたものではない。市民や有識者が構成する歴史的地区審議委員会では、例えば、火事で焼けた80年前竣工の建物を修理するために、焼ける前の立面図を要求されたりする場合もある。また、制度に精通した建築家の素晴らしいプレゼンテーションですんなり改造プランが認められることも多く、家主にとってはなにかと物入りである。歴史的地区には多様な人々が住むことは難しい。



中央分離帯の豊かな緑を通して道路の反対側の住宅をのぞむ

オバマ大統領が景気刺激策にサインした場所は、グレーターパークヒル地区に隣接するため、地区の美しい街並みを目にした方もいらっしやるかもしれない。美しい街並みは人々の大きな努力によってリノベートされてきたし、今後も生き続けて行くだろう。

(米国都市計画協会 www.planning.org/greatplaces/ もご覧下さい)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2009年5月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

Exchange with KIFA

韓国女性建築家との交流

幼老複合福祉施設の見学

東由美子 HIGASHI Yumiko

ロンドンに住むUIFA JAPON 会員キャロル・マンクさんの紹介でKIFA（韓国女性建築家協会）のメンバー7人が2月25日から28日まで東京を訪れた。その内の1人パクさんは幼老複合施設の研究をしていて東京近郊の施設を見学したいという。彼女が調べて計画した見学コースの他にUIFA JAPONのメンバーからの情報も得て、保育園やその他複合施設をいくつか紹介し、私は26日の1日彼女たちと行動を共にし、私の設計した高齢者のグループリビング「ほっと館」と港区の「プラザ赤坂」という幼老複合施設を見学した。

「プラザ赤坂」は廃校となった校舎を増改築した施設で、区立の特別養護老人ホームと高齢者在宅サービスセンター、幼児から中高生まで使える児童施設の合築。増改築の方法や高齢者と子どもたちの交流の仕方などとても興味深く、KIFAのメンバーからもすどい質問が出されていた。

韓国でも少子化が進みこのような施設が必要とされているのかもしれない。私にとっても充実した見学となった。



「プラザ赤坂」を見学するKIFAのメンバーと筆者(中央)

Invitation この指とまれ

《旧朝倉家住宅とヒルサイドテラス見学会》

総会での榎先生の記念講演に先立ち、ヒルサイドテラスと旧朝倉家住宅の見学会を開催いたします。是非ご参加ください。

日時 : 平成21年6月7日(日) 13:30~15:30

集合 : 旧朝倉家住宅正面入り口前

東京都渋谷区猿樂町29-20

参加申込み : UIFA JAPON 事務局

■ 役員会報告

第11回 2月26日 (2009年) 災害復興見守りチームのオープンガーデン講演会の報告。会員状況及び会費入金状況の報告。会報第78号の発送について報告。第46回交流の会準備確認、21年度総会基調講演企画について報告。ASFA 組活動報告。ルーマニア世界大会報告書予約状況報告。韓国女性建築家会議の代表来日。理事会終了後に交流会が催された。

第12回 3月25日 (2009年) 20年度事業の総括及び21年度企画について報告。第46回海外交流会の総括。21年度総会基調講演講師及び会場の報告。ルーマニア世界大会報告書進捗の報告。韓国世界大会の進捗について韓国から連絡があったことが報告された。

第1回 4月22日 (2009年) 記念講演会の内容について、入退会について報告。2009年度の事業計画、会報79号の進捗について報告。災害復興見守りチームから、オープンガーデン



Member's Publication

会員の本

「韓国現代住居学

—マダンとオンドルの住様式」

ハウジング・スタディ・グループ著

(代表 鈴木成文 メンバー 在塚)

1990年 建築知識社

*紹介書籍は、現在絶版ですが、アマゾン等のNET古書店で購入が可能です。

中野 晶子 NAKANO Akiko

16世紀に実在した宮廷女官医女チャングムのドラマでは、障子紙が内側に貼られている、小ぶりの居室の中で、王や王妃の起居の日常と女官達の策謀が綴られています。場面設定の部屋の大きさがとても人間的で、日本の大奥や京都御所のような何十畳にも及ぶ大広間でない事に、好感を持っていました。

年間平均気温が東京よりも6℃低いソウルに代表されるように、韓国の冬は厳しい。伝統的な住宅では、煙を床下に誘導するオンドルで暖をとれる空間は、アンバン=内房 [家族の団らん、夫婦の就寝、冬の食事]、サランバン=舎廊房 [主人の居場所、接客]、コノバン=越房 [子女の部屋] 等のコンパクトな個室で、暖を逃がさない独立した保温性を主眼においています。これらは、床暖のないテーチョン=大庁 [中庭に解放されている板張りの広い空間] やマル=抹楼 [夏の食事、板張りの部屋] を界して浮遊しているような配置になっています。風通しを旨とした日本の「田の字型」プランのような連続した開放性をむしろ排除しているように思います。

近代になってオンドルの熱源が煙から温水に変わって、集合住宅や建て売り住宅でのプランの変容はあっても、キムチをつけて保管するタヨンドシル=多用途室は、欠かせない存在感があります。アンバンが「藝;け」=日常を支え、その家の文化を継承して行った、まさに“Mother's Room”であったことはこの本の執筆者の一人、在塚礼子が熱く語っています。

現地の生活を時々刻々追って行く取材方法や、カラー写真50枚、図版は惜しげもなく掲載されていて、路地裏まで追いかけて行く報告と、写真満載の編集は臨場感が増し、370ページは見事なBook Designで仕上がっています。

事業の一つ、神社参道の野草の状況報告。ルーマニア大会報告書完成の報告。UIFA JAPON紹介パンフレット作成について検討。

■ 編集後記

庭のトカゲは、ねこ「魯迅」に連れられてオンドルタイル床の上で遊ぶ(中野) 世田谷区庁舎のその後については<http://www.jia-setagaya.com/>で(在塚) タージ・マハルの素晴らしさも、その背景を知ればことさら印象深く(古村) 里山とは、自然に過度に抗わず自然のままでもない風水思想の具現か(石川) 次号は“環境を読む”成功期待(渡辺) 司馬遼太郎「街道をゆく」2.韓のくに紀行、28.耽羅紀行を読み進む(井出) 先日会員の方と初対面の機会が。「編集委員がんばってね」の一言に感激(飯田) 79号編集をきっかけに、放送大学「韓国の住文化」を興味深く聴講(須永)